

## 童話集『三つの宝』研究

——その編集方針と芥川童話の方向性——

足立直子

であります。

即ち、実際の刊行こそ、芥川の没後となったが、その計画に於いては三年前、つまり一九二五年頃から既に構想されていたことが窺える。このことを重視するならば、彼が自身の作品の中で、如上の六編については間違いなく童話と見做し、かつ、自身の童話の方向性を体現しているものとして捉えていたと言えるだろう。それは発表媒体との関連で見ても明らかである。以下、初出発表順に掲げる。

・「蜘蛛の糸」 『赤い鳥』第一巻第一号 一九一八 [大正七]

年七月

・「魔術」 『赤い鳥』第四巻第一号 一九二〇 [大正九]

年一月

・「杜子春」 『赤い鳥』第五巻第一号 一九二〇 [大正九]

年七月

・「アグニの神」 『赤い鳥』第六巻第一号 一九二二 [大正一

### 一、童話集『三つの宝』と「犬と笛」をめぐる問い

芥川龍之介には、唯一の童話集が存在する。歿後に刊行された『三つの宝』（改造社、一九二八 [昭和三] 年六月）である。ここには「蜘蛛の糸」「魔術」「杜子春」「アグニの神」「三つの宝」「白」の六編が収録されている。挿絵は小穴隆一が担当し、序（一―三頁）は佐藤春夫、跋（一五七―一五九頁）は小穴隆一が手がけた。また、一九四一年二月には、同じく改造社からこの文庫本が刊行され、その際に、小穴隆一による「差畫について」（一五九―一六〇頁）という文章が加えられている。

『三つの宝』の成立経緯については、跋の中で小穴が次のように述べている。

この本は、芥川さんと私がいまから三年前に計画したもの

○」年一月

「アグニの神(続き)」『赤い鳥』第六卷第二号 一九二一

「大正一〇」年二月

・「三つの宝」『良婦の友』第一卷第二号 一九二二「大正

一一」年二月

・「白」『女性改造』第二卷第八号 一九二三「大正

一二」年八月

これらは全て、児童や女性を読者として想定しており、童話という区分において一冊の童話集にまとめられたその妥当性が確認できる。その一方で、『赤い鳥』に掲載された作品の中で、唯一『三つの宝』には収録されなかった作品がある。それが「犬と笛」である。この作品は、『赤い鳥』第二卷第一号、第二号(一九一九年一月一日、一五日)に分載された。研究史においても、この点については長らく疑問として扱われることが多かったが、近年、下岸大助氏によって、この作品が小島政二郎<sup>(注1)</sup>による代作であったことが未収録の背景にあることが指摘された<sup>(注2)</sup>。下岸氏は、実際に『赤い鳥』への発表用原稿にもあたり、その筆跡や原稿用紙の精査も行っており、「犬と笛」が小島による代作であった蓋然性を説得力をもって検証している。本稿においても、当時、『赤い鳥』の編集助手であった小島が「犬と笛」の成立に大きく関わっていることについて異論はないが、どの程度の関わりであったかについて述べるには慎重を要する

と考えている。

なぜならば、『三つの宝』とはほぼ同時期に刊行された芥川全集<sup>(注3)</sup>の存在においても留意する必要があるからだ。

この全集に収録された「犬と笛」には「いく子さんに献ず」という献辞が表題横に付されている<sup>(注4)</sup>。この点について、下岸氏は全集の編集にも関わっていた小島によって、自己が代作したことを隠すためのカモフラージュとして掲げたと述べているが、この点は納得しがたい。もしそうであれば、「犬と笛」発表当時に実際、芥川と交流のあった「いく子」の名前を初出では伏せ、全集収録時には掲載するという行為はあざとすぎるのではないだろうか。寧ろ、芥川の手によるものとして草稿があるいは下書きにおいては存在したが、小島による編集過程において何らかの事情で省かれたこの「献辞」を全集において、芥川の意向通り改めて付したと考える方が自然ではないだろうか。

これらを踏まえた時に、その重要性が意識されるのは『三つの宝』の編集方針である。「犬と笛」が代作であったことが未収録につながったという可能性も完全には否定できないが、寧ろその作品の内容が、編集方針に合致しなかったという仮説も成り立つであろうことを指摘したい。そのために、『三つの宝』に収録された六つの作品の共通性と、そこから零れ落ちる「犬と笛」の異質性を検証していくこととしたい。そしてそのことにより析出されるであろう童話集『三つの宝』の編集方針を押さ

えた上で、芥川童話の核にあるものを浮き彫りにし、今後の芥川童話研究における一つの有用な尺度を明らかにしていくこととする。

## 二、童話集『三つの宝』収録作品の共通性

ここからは『三つの宝』収録の六つの作品について、掲載順において見ていくこととする。具体的には、「白」「蜘蛛の糸」「魔術」「杜子春」「アグニの神」「三つの宝」の順に取り上げていくこととする。

「白」の梗概は次の通りである。犬の白は、友達の黒が殺されようとしている所に遭遇するが、恐怖でその場から逃げ出してしまった。その後、家に戻った白は身体が真っ黒になっており、飼い主のお嬢さんや坊っちゃんから追い出されてしまう。以降、白は臆病な自分と闘うために、何度も危険な場に敢えて身をさらすが、命は奪われることはなく、かえってその行為は人命救助等につながり、新聞でも「義犬」などという形で取り上げられることとなった。そのような中、疲れ果てた白は、最後にお嬢さんや坊っちゃんに一目会いたいとお月様に祈った。そして、家に帰ると、驚いたことに今度は二人から喜んで迎え入れられた。白の身体は白色に戻っていたのである。

「蜘蛛の糸」の梗概は、次の通りである。ある日、お釈迦さま

が極楽の蓮池のほとりを歩いていたところ、蓮池のはるか下の地獄で、健陀多という男が血の池でもがいているのが見えた。健陀多は多くの凶悪な罪を犯した人物であったが、一度だけ、道端の蜘蛛の命を救ったことがあった。お釈迦さまはそのことを思い出し彼を救い出すべく、地獄に向かって蜘蛛の糸を垂らした。健陀多はその蜘蛛の糸をつかんで、一生懸命に上へ上へとのぼっていった。ただし、途中で休憩していた折に、下を見ると、下からその蜘蛛の糸をつかんで、何百、何千という罪人が、行列になって近づいてきていた。健陀多はこのままでは、糸がきれてしまうと思い、「この蜘蛛の糸は己のものだぞ。（中略）下りろ。」と叫んだ。その途端、糸は健陀多がいるところで切れてしまい、罪人たちと共に、真っ逆さまに落ちていった。これを見ていたお釈迦さまは、悲しそうな顔をしてまた歩き始めた。

「魔術」の梗概は次の通りである。主人公の「私」はインド魔術の使い手であるミスラ君の家を訪れる。ミスラ君の家では実際に魔術を見せてもらい、すっかり魅了された「私」は、魔術を教えてほしいと懇願した。乗り気ではなかったミスラ君であったが「欲を捨てること」を条件に「私」に魔術を教えたところ、結局、「私」はその約束を守ることができなかった。

「杜子春」の梗概は次の通りである。唐の都、洛陽に杜子春という若者がいて、両親の死後に財産を使いつくし、途方に暮れ

ていた。ある時、不思議な老人が杜子春に声をかけ、それを引きかけに大金持ちになる体験を二回繰り返すが、その度に散財し、散財をすれば、周りの者がいなくなるという状況であった。老人が三度目、杜子春に財産を与えようとした時、杜子春は人間というものに愛想を尽かしたので、仙術を教えてほしいと懇願した。杜子春はその老人が仙人であることを見破っていたのである。仙人は、杜子春を蛾眉山へ連れて行き、仙人になるための試練を与える。中でも、何があっても口をきいてはならないということを言い聞かせて老人は去っていった。杜子春はあらゆる責め苦に耐えたが、最後に地獄で馬の姿に変えられた母親がむち打たれながらも、息子のことを気づかう姿を目の当たりにし、思わず「お母さん」と漏らしてしまった。それと同時に、杜子春は現実に戻されるが、彼にはもう仙人への未練はなく、これからは人間らしい暮らしをしようと告げるのであった。

「アグニの神」の梗概は次の通りである。上海のある屋敷に、インド人の占い師である老婆が住んでいて、恵蓮と呼ばれる少女にアグニの神を乗り移らせて予言をさせていた。その屋敷の前を偶然通りかかった日本人の遠藤は、その少女が行方不明になっている妙子であることに気づき、何とか彼女を救い出そうとした。救出の試みは一度目は失敗するが、二度目、妙子にアグニの神が乗り移ったふりをさせて、脱出を試みるという計画

を立てた。計画の日、妙子の口から少女を父親のもとに返すようアグニの神の言葉が告げられるが、老婆はその言葉を信じず、演技をしていると思った妙子をナイフで殺そうとした。しかし、そこに飛び込んできた遠藤が見たものは、老婆がナイフで刺されたのかと尋ねるが、遠藤はアグニの神が殺したと答えるのであった。

表題作である「三つの宝」については、童話集において重要な位置を担うため、この後、新たな章を起こし、そこで詳細を扱う。

### 三、表題作「三つの宝」で描かれたもの

「三つの宝」は、王子の以下のような言葉で締めくくられる。王子 さうです。(見物に向ひながら) 皆さん! 我我三人は目がさめました。悪魔のやうな黒ん坊の王や、三つの宝を持つてゐる王子は、御伽噺にあるだけなのです。我我はもう目がさめた以上、御伽噺の中の国には、住んでゐる訣に行きません。我我の前には霧の奥から、もつと広い世界が浮んで来ます。我我はこの薔薇と噴水との世界から、一しよにその世界へ出て行きます。もつと広い世界! もつと醜い、もつと美しい、——もつと大き

い御伽噺の世界！ その世界に我我を待つてゐるものは、苦しみか又は楽しみか、我我は何も知りません。唯我我はその世界へ、勇ましい一隊の兵卒のやうに、進んで行く事を知つてゐるだけです。

この作品は、童話集の表題作でもあることから、芥川童話における方向性を最も顕著に投影されていることが推測される。その意味では、王子のこの言葉は改めて吟味される必要性があるだろう。

その前に簡単に「三つの宝」の梗概について整理しておく。

森の中で三人の盗賊が三つの宝をめぐつて争っていた。宝とは「一飛びに千里飛ぶ長靴」「着れば姿の隠れるマントル」「鉄でもまつ二つに切れる剣」である。そこへ王子が通りかかり、盗賊たちに事情を尋ねた。王子は一つずつ分けることを提案するも受け入れられず、結局は、王子が身に着けていた長靴、マント、剣と交換することで、強盗たちも承諾しその場は解決したかに見えた。但し実際には強盗たちが持つていた三つの宝は全て偽物で、王子はまんまとだまされたのであった。

何も知らない王子は次に宿屋の酒場で、この国の王女の結婚話について耳にする。それは、アフリカの王が三つの宝と引き換えに無理やり王女を娶ろうとしている内容であった。この話を聞いた王子は、自らが王女を助けてみせると意気込むが、早速、長靴が偽物であったことが判明し、宿屋の主人からも客た

ちからも彼の計画は止められる。ただし、王子は飛び出して去つてしまふのであった。

その後、王女の元へやってきた王子であったが、盗賊たちと交換した残り二つの宝、マントと剣も偽物であったことが明らかとなる。その一方でアフリカの王が登場し、彼が持つていた三つの宝が全て本物であることが次々と披露されていった。ただ、王女がアフリカの王を嫌っていることは変わらず、その結果、とうとう、アフリカの王は、王子への敗北を認める。

宝があれば王女を娶ることできると思っていたアフリカの王、宝があれば王女を救えると思っていた王子、アフリカの王の優しさを知らず偏見のみで彼を嫌っていた王女、三人ともが自らの誤りに気付くこととなった。三人は仲直りをし、最後、王子は観客に向かつて、「悪魔のやうな黒ん坊の王や、三つの宝を持つてゐる王子は、御伽噺にあるだけ」と述べた上で、そのことに気付いた以上、「もつと広い世界」へ進んでいくことを呼びかける。「勇ましい一隊の兵卒のやうに、進んで行く事」を力強く訴えたのであった。

以上が梗概である。最後のメッセージは、典型的な「御伽噺」を空想するのではなく、現実を見据えた上で、勇ましく進んでいくことへの、子どもたちに向けた呼びかけと言えることができるだろう。これらを踏まえた時、先に問題提起した童話集『三つの宝』の編集方針も自ずと明らかになってこよう。

#### 四、「犬と笛」の異質性

では、「犬と笛」はなぜ童話集には収録されなかったのか。ここでは、一旦、その成立過程についてはおいておき、内容について確認していくこととする。

「犬と笛」の梗概は次の通りである。昔、髪長彦と呼ばれている木こりがいた。髪長彦は笛の名手で、彼が笛を吹くと山にいる鳥や獣たちが集まりその音色を楽しんでいた。ある時、葛城山を守る三人の神さまが順に現われ、それぞれが笛のお礼に、不思議な力を持つ犬を髪長彦に与えた。「足一つの神」は、どんな遠いところのことでも嗅ぎ出すことのできる「嗅げ」という白犬を、「手一つの神」は、誰でも背中へ乗せてどこまでも空を飛んでいける「飛べ」という黒犬を、「目一つの神」は、どんな鬼神でも噛み殺すことのできる「噛め」という斑犬を授けたのであった。

それから、四、五日して、髪長彦は二人の侍から、飛鳥の大が二人のお姫様を鬼神にさらわれたことを聞き、救出しようと考え。まず、「嗅げ」にお姫様の行方を探させ、一人は生駒山の洞穴で、食蜃人に囚われていると告げた。今度は、「飛べ」に食蜃人のところまで連れて行かせ、最後に、「噛め」に食蜃人をおかみ殺させた。そうして、姉のお姫様を救い出すことができ

た。同様に、笠置山で土蜘蛛に囚われている妹のお姫様を犬たちの協力によって救い出すことができたのであった。しかし、二人の侍にその手柄を危うく奪われそうになってしまいが、生駒山の神さまである駒姫と笠置山の神さまである笠姫に助けられ、かつ、髪長彦に救い出された二人のお姫様が機転を利かせたこともあり、無事、大臣に、髪長彦による二人のお姫様の救出について信じてもらうことができた。その結果、髪長彦はたくさんの褒美をもらい、かつ、お姫様の一人と結婚することを許された。

ここから確認できることは、「犬と笛」と「三つの宝」とは、主人公が三つの物をもらうという点では共通しているが、その結末は対照的であるということである。つまり、「犬と笛」では、贈られた三匹の犬は大団円に向けて欠かすことのできない存在となっていくが、「三つの宝」では、王子が手にした三つの宝はことごとく偽物であり、かつ、最後には、「三つの宝を持っている王子は、御伽噺にあるだけなのです」とまで語られている。あたかも成功譚を成り立たせる魔法の品などは存在しないと告げているかの如くである。

以上のことから、「犬と笛」は芥川の童話の中では、異質なテーマを掲げており、このことから、童話集『三つの宝』には収録されなかった可能性が高いと考えられる。



## 五、『三つの宝』の編集方針から指摘できる芥川 童話の特徴

先の章でも述べた通り、童話集『三つの宝』に「犬の笛」が収録されなかったことに、この童話集の編集方針が透けて見えるのであり、延いては、芥川童話の特徴が浮き彫りになるだろう。言うなれば、成功譚を成り立たせる魔法の品などは存在しないという認識こそが、芥川童話の核には据えられていることが明らかとなった。

ここで、『三つの宝』の最終部を今一度、見てみよう。

王子 さうです。(見物に向ひながら) 皆さん! 我我三人は目がさめました。悪魔のやうな黒ん坊の王や、三つの宝を持つてゐる王子は、御伽噺にあるだけなのです。我我はもう目がさめた以上、御伽噺の中の国には、住んでゐる訣に行きません。我我の前には霧の奥から、もつと広い世界が浮んで来ます。我我はこの薔薇と噴水との世界から、一しよにその世界へ出て行きませう。もつと広い世界! もつと醜い、もつと美しい、——もつと大きい御伽噺の世界! その世界に我我を待つてゐるものは、苦しみか又は楽しみか、我我は何も知りません。唯我我はその世界へ、勇ましい一隊の兵卒のやうに、進んで行

く事を知つてゐるだけです。(傍線引用者、以下同様)

改めて確認すると「悪魔のやうな黒ん坊の王」についても「御伽噺にあるだけ」とされていることが分かる。つまり、ここからは完全な悪者の存在についても否定されていると理解することができる。完全な悪も完全な奇蹟も存在しない、それこそが我々が生きている世界であり、我々はその世界へ勇ましく進んで行くしかないというメッセージが、『三つの宝』の主題であると言うことができるだろう。この作品を表題作に据えた童話集『三つの宝』もまた然りである。

因みにここまで主には「成功譚を成り立たせる魔法の品などは存在しない」という完全な奇蹟など存在しないという点において、童話集『三つの宝』の編集方針を見てきたが、翻って確認するならば、完全な悪など存在しないという点においても、収録作品においては共通性が見出せる。

まず、「白」は黒を見殺しにした白が改心していく話であり、ここでは完全な悪なるものは存在しない。次に、「蜘蛛の糸」において、健陀多は最終的には自らのみ極楽へ行こうと利己的な判断をするが、何よりもお釈迦さまから目に留めてもらった背景には、一匹の蜘蛛を助けたという前提があつてのことである。そして「魔術」においても次のような描写がある。

私が指の間に挟んだ葉巻の灰さへ、やはり落ちずにたまつてゐる所を見ても、私が一月ばかりたつたと思つたのは、

ほんの二三分の間に見た、夢だつたのに違いありません。けれどもその二三分の短い間に、私がハッサン・カンの魔術の秘法を習ふ資格のない人間だといふことは、私自身にもミスラ君にも、明かになつてしまつたのです。私は恥しさをうに頭を下げた儘、暫くは口もきけませんでした。

「魔術を使はうと思つたら、まづ慾を捨てなければなりません」というミスラ君からの戒めを破つた私であつたが、そのことに對して「恥しさうに頭を下げた儘、暫くは口もきけませんでした」という様子を示していることから窺えるように、ここには自己の欲深さを恥じ、うな垂れる有り様が指摘できる。次に「杜子春」は、そもそも、人間不信になつた杜子春が人間を信じる気持ちを回復していく物語であるので、ここにも完全な悪は設定されていない。「アグニの神」は作品の枠組みが他の作品と異なり、「運命の力」對「人間」の構図が際立つように描かれてゐるため、同じ尺度で計るのは難しい側面がある。ただし、一つ言えることは、「運命の力」の前に佇む人間、ここでの「婆さん」は、裁かれる側の者であり、決して完全な悪というわけではない。「三つの宝」は先に述べた通りである。

一方、童話集『三つの宝』に収録されなかつた「犬と笛」はどうであらうか。姉妹のお姫様を捉えていた、食蟹人並びに土蜘蛛は、髪長彦が連れる三匹の犬に退治され、そして、髪長彦の手柄を横取りしようとした二人の侍も、悪事が露見し最後に

はその場から追い出される展開となつてゐる。換言すれば、「犬と笛」は、いわゆる典型的な勧善懲惡型のストーリーなのである。

この視点に立つて、芥川の童話群を改めて捉え直すならば、そこには新たな作品世界の地平が明らかになるだろう。即ち、安易に勧善懲惡型をよしとせず、不条理な世の中において、生の可能性を模索すること、「勇ましい一隊の兵卒のやうに、進んで行く事」を子どもたちに向けて提示してゐるのではないだろうか。

とは言え、「犬と笛」も含めての共通性もないわけではない。それは、背景にある宗教の存在である。「蜘蛛の糸」は仏教、「犬と笛」は日本古来の神々、「魔術」はゾロアスター教、「杜子春」は道教、「アグニの神」はヒンドゥー教、「白」は祈りの対象としてのお月様である。子どもたちに敢えて、「人知を超える存在」を意識させながら展開していくこの手法も、芥川の童話・児童文学の特徴としては看過できない点であらう。この点については、別稿において、今後、更に具体的に個々の作品を対象として考察を深めていく予定である。

芥川文学における「人知を超える存在」へのアプローチは従来、切支丹物やキリスト教作品群の中から読み解かれることが多かったが、宗教的枠組みを設定し続けた、芥川童話の中にもまた、その重要な手がかりがあることを問題提起し、今後の研



究展望としてここに記しておくこととする。

注

1. 関口安義氏は『芥川龍之介事典』（明治書院、一九八五「昭和六十」年十二月、六十八頁）において次のように指摘している。

芥川の氣に入らぬ作品であったためか、生前に企てられ、没後一年ほどして刊行された大判の童話集（改造社、昭和三・六・二〇）にも収録されることなく終わった。

2. 下岸大助『『赤い鳥』と代作問題―徳田秋聲「唐傘」・芥川龍之介「犬と笛」ほか―』（『国語と国文学』明治書院、二〇一九「令和元」年十月）。

3. 『芥川龍之介全集』第二卷、岩波書店、一九二八「昭和三」年一月。  
4. 「いく子」については、平岡敏夫氏が、芥川夫人との書簡のやりとりを公開している。

「いく子」と申しますのは私の実家（塚本）の親戚の者で大正七年犬と笛を作りました頃ははっきりした年令は忘れましたが数年十五歳前後の少女でございました 私は大正七年に結婚致しましたので其の前後よく「いく子」と主人も会う機会があった訳でございます 尚親戚と申しますのは「いく子」は私の母の従妹（血すじは引いて居りませんが）に当るのでございます（『芥川龍之介「犬と笛」―その献辞について―』『稿本近代文学』第十八集、一九九三年十一月、九十六頁）

\*本文引用は全て『芥川龍之介全集』全二十四卷（岩波書店、一九九五年十一月～一九九八年三月）に拠る。なお、適宜、旧字は新字に改め、ルビは省略した。